The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	トナカイエベンキ人における白樺の皮の利用 : 大興安嶺の森に生きる人々の知恵
Author(s)	思, 沁夫
Citation	季刊リトルワールド. 2001, 78, p. 5-10
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/25924
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

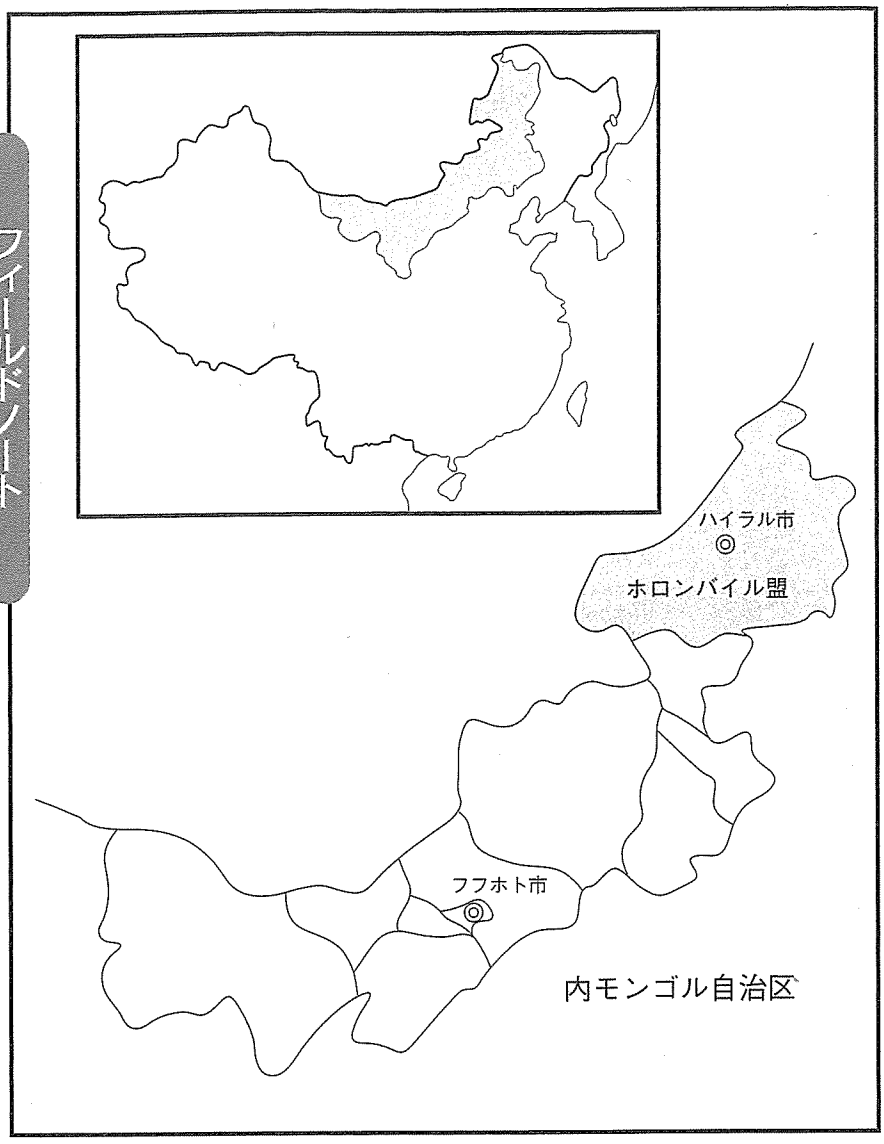
フィールドノート

トナカイエベンキ人における白樺の皮の利用

―大興安嶺の森に生きる人々の知恵―

思　沁夫（金沢大学大学院社会環境科学研究科）

FIELD NOTE



エベンキ人とトナカイエベンキ人

中国は56の民族から構成する多民族国家である。漢民族が中国の総人口の約92％を占めるため、漢民族以外の民族をまとめて「少数民族」という。エベンキ民族はこの55の少数民族の一員である。エベンキ民族は内モンゴル自治区、黒龍江省などに分布しているが、8割以上が内モンゴル自治区のホロンバイル地域に住んでいる。ホロンバイル地域のエベンキ人を方言、生業（牧畜、農業、トナカイ飼育）などの異なる特徴から、3つのグループに分けることができる。トナカイエベンキ人とはそのうちの人口200人ぐらいの小さな方言集団を指す。彼らは大興安嶺の北西部の森で、トナカイ飼育と狩猟によって生活を営んでいる。

民族村入り口に建つトナカイエベンキ人のシンボルであるトナカイの彫像。

白樺林

大興安嶺と調査地

大興安嶺とその周辺の大興安嶺の恩恵を受けている草原地帯は、かつて、中国の北方諸民族、モンゴル、満、エベンキ、ダフール、オロチョン、シボなどの発祥の地であり、いろいろな民族が出会い、さまざまな文化が影響し会う北アジアの最も重要な「文化十字路」地帯であった。

大興安嶺は中国の東北地方に位置し、黒龍江省と内モンゴル自治区にまたがる総面積が2860万ヘクタールもある中国で一番広い森林地帯である。たくさんの川が大興安嶺の森林の奥から源を発し、額爾古納河流域、嫩江流域、黒龍江流域などの水系を形成し、また森林の中には確認されただけで500種以上の植物、国の動物保護リストに載っている30種近くの動物をはじめたくさんの動物が生存している。大興安嶺は1つの生態系を形成しており、中国の東北地方全体の気候、生態の調整と維持に大きな役割を果たしている。大興安嶺の森林の伐採、植林などは内モンゴル自治区と黒龍江省に所属する「林業管理局」によって行なっている。

大興安嶺の北西部は唐松、白樺、樟子松などからなる森に覆われている。かつて、トナカイエベンキ人は獲物とトナカイの餌を求めて移動生活を繰り返していた。1965年政府はオルグヤ（エベンキ語で白樺の森に覆われた土地という意味）という地に民族村を建設し、定住化が進められた。村の総人口は569人で、そのうちトナカイエベンキ人は約4割を占めるが、現在、30人～40人のトナカイ放牧者以外の、ほとんどのトナカイエベンキ人は現代的な設備が整っている村で暮らしている。

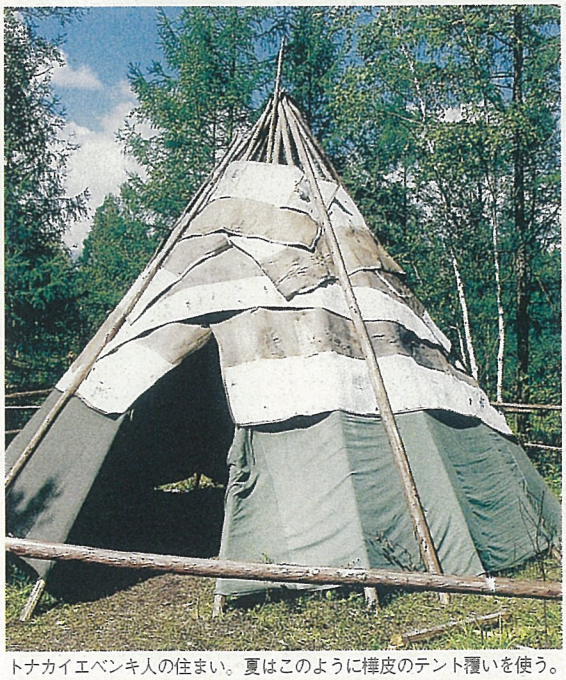
私は1996年から2000年にかけて、5回この地域を訪ね、現地調査を行なってきた。トナカイエベンキ人にとって大興安嶺はトナカイの放牧地と猟場であり、森と森に生きる動物は彼らの生活に必要なものすべてを提供してくれる。また、トナカイエベンキ人は大興安嶺の恵みである動物の毛皮や樺皮で衣服や日用品などを作って利用する。ここでは、私が現地で見てきたトナカイエベンキ人が作る白樺の皮製品の話を紹介したい。

トナカイの乳を搾っている。トナカイエベンキ人はトナカイの乳と紅茶でミルクティーを作る。

白樺の皮製品

トナカイエベンキ人による白樺の皮製品の利用

白樺の皮を用いて生活用品や生産道具などを作って利用する文化は、ヨーロッパの北部から、シベリア、アムール川周辺地域と大興安嶺、そして北米までの広い地域の先住民の間で見られる。中国の東北地域に関していえば、この地域に住んでいる少数民族は古くから、白樺の皮を利用する技術を持っていた。考古学の発見や中国の古い文献によると、3000年以前にそのような技術がこの地にあったといわれている。例えば、1987年にトナカイエベンキ人が住んでいる地域から、1770年前の樺皮製品が発掘された。



トナカイエベンキ人の住まい。夏はこのように樺皮のテント覆いを使う。

この地域では、エベンキ、オロチョン、ダフール、モンゴル、ナナイなどの民族の間で白樺の皮の利用は最も盛んに行われ、製品の種類も多く、デザインも多彩で、作る技術も発達していたと言える。しかし、近年大興安嶺の開発や地域社会の経済発展などによって、多くの人が町で生活するようになり、また、市場で売られている日常生活用品も驚くほど豊富になったため、白樺の皮製品を作れる人の数が減り、ほとんどのところでは博物館でしか見られなくなってきた。

トナカイエベンキ人（特に若い世代）のなかでも、白樺の皮製品を作る技術が失われており、彼らの生活から白樺の皮製品の姿が消えつつある。そのなかで人数は非常に少ないとはいえ、いまでも、軽い、壊れにくい、捨てても森を汚さないという特徴から、それを作り、愛用しているトナカイエベンキ人がいる。

トナカイエベンキ人の白樺の皮で作った製品には、狩猟や川を渡る時使う舟（3～4人が乗れる）、小麦粉やものを入れ、移動する時はトナカイの背中に乗せて運ぶ箱（一番外側が動物の毛皮で覆われているものが多い）、食器類を入れる箱、さまざまな形の小物入れの箱、川から水を運ぶための桶、夏用のテントの覆い、赤ん坊を寝かせるゆり籠、女性用のハンドバッグ、そして「口煙」＝タバコを入れる小さい箱などがある。Aさん（90歳）は20年前に友人からもらったハンドバッグ（いまは老眼鏡を入れている）をいまでも使っている。

トナカイエベンキ人は上に挙げたような丈夫

な、何年あるいは何十年も使えるもの以外に、日常生活でよく使う洗面器やまな板などの代用も作る。また、ナイフや鋏などを使ってトナカイや動物の切り絵、あるいは小さい舟などを作る。これらは大人から子供に送るプレゼントであり、子供たちの大好きなおもちゃであって、彼らの絆を強くし、共通の想い出を作るものでもあった。

樺皮で作ったボールや洗面器の代用品（臨時用）

トナカイエベンキ人の間で広く知られている物語がある。ある日、狩猟に出かけた一番尊敬されているメリガン（もっとも腕のいいハンター）が、恋人に手紙を書こうと思った。紙もなければ、ペンもない。もちろん誰もいない森の中で、郵便局も存在しない。しかし、彼は自分の行く先を仲間に知らせるため、白樺の木にしるしを刻もうとした時、ふっと白樺の皮を使えば手紙を書けるのではないかと考えた。トナカイエベンキ人は移動や狩猟中に、自分の位置、行く方向を木にいろいろな記号を刻む方法で伝える。彼はナイフを火で熱してペンの替わりに使い、白樺の皮にロシア語の手紙を書いた。長い間トナカイエベンキ人はロシア人と接触していたため、ロシア語をできる人が多くいた。そして、その手紙を彼女に直接渡そうと思った。しかし、彼は獲物を追って急いで川を渡った時、その手紙を川に落としてしまった。彼はそのことに気がつかなかった。川の流れに沿って流れていった手紙は偶然、水を汲みにきていた彼女の姉に発見され、彼女の手に渡ったという。

物語の真実性は別として、この物語からも、白樺の皮はトナカイエベンキ人にとって、最も近い存在であり、それがいつも彼らの生活に役立つことに対する親近感、愛着があったと解釈できるかもしれない。私も現地調査中に、彼らが樺皮をメモ用紙の替わりに使ったのを何回も見たことがある。いまも白樺の皮製品を作っている73歳のＢさんは「白樺は神の贈り物」という。

Ｃさんは樺皮の船を作れる数少ないトナカイエベンキ人の一人である。

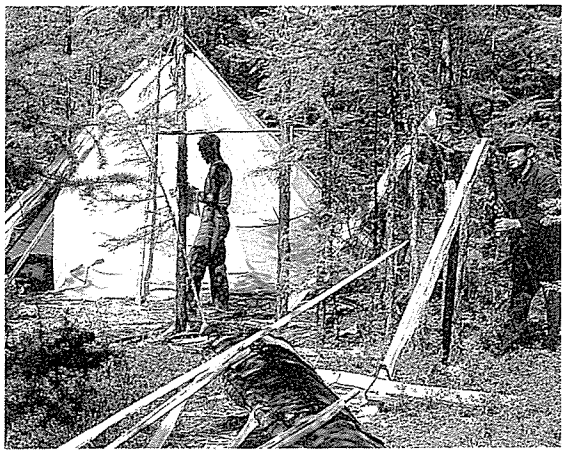
白樺の皮製品の作り方

白樺の皮を利用してものを作るには、白樺の木から皮を剥く、その皮を水につけて、あるいは土に埋めて柔らかくする、そして整形、加工するという3段階が必要である。樺皮を剥く時期

樺皮で作ったタバコの箱

は春の終わりから初夏にかけて、つまり5月～6月が一番いいと言われる。この時期の白樺の木は水分をたっぷり含んでいるため、剥きやすいし、樺皮の質もよい。トナカイエベンキ人も大体この時期に白樺の皮製品を作る。ここでは、いろいろな製品の作り方を詳しく紹介することはできないが、舟を作る時に材料となる樺皮の作り方と箱の作り方を例に、記述することにする。

(1) 舟作りの材料となる樺皮の作り方：まずは木を選ぶことからスタートする。木は直径40cm以上、まっすぐで、表面がなめらかでありあま

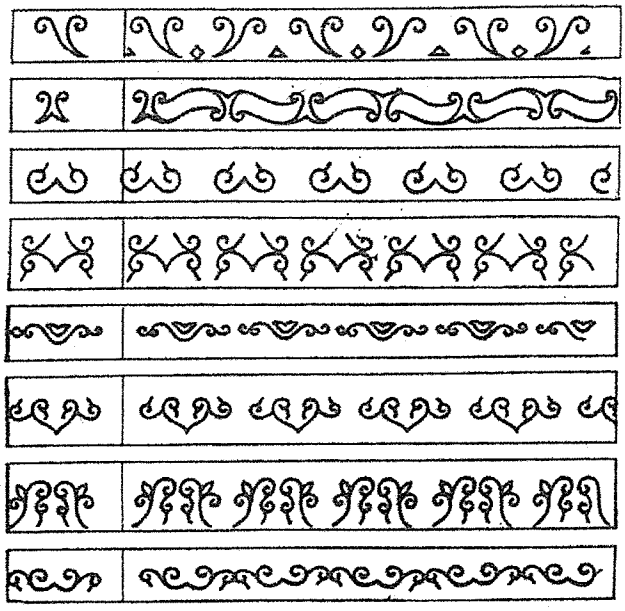

樺皮の船を作っている。

り傷跡がないことが条件である。木を選定したら皮を剥く。まず、取りたい部分の上辺部にエベンキ式のナイフで切りこみをいれ、次に下辺部に同様に切りこみをいれる。そして、縦に一本切りこみをいれると皮自体の巻き込む性質によって自然に剥げ落ちる。ここで大切なことはナイフの先端部分を指でコントロールし、木に深すぎる傷をつけないことである。樺皮を取るだけでは木は死なない。彼らの経験によると、上手に皮をはいだ木は13年後にもとに戻るという。切り取った樺皮は水につけるか、あるいは湿った土に埋めて柔らかくする。これで舟を作る材料としての樺皮はできたことになる。あとは木材で作った舟の枠に張って固定する。

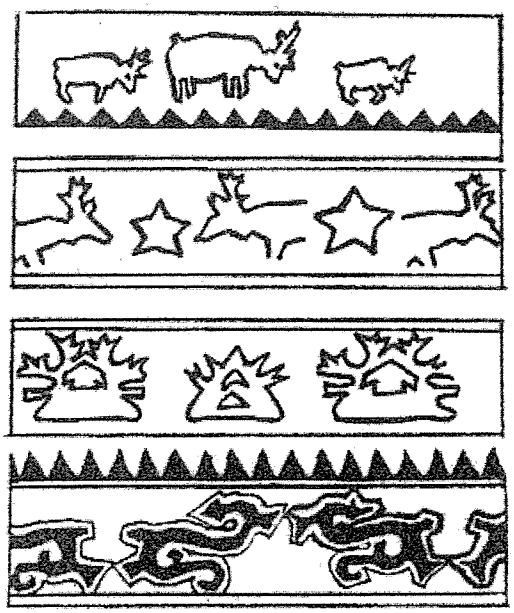
(2) 丸い形の箱の作り方：箱の大きさによって木を選び、切り倒す。次に、箱の縦の長さより少し長めに、木をいくつかに切断する。そして、棒で木をたたき、皮と木部が離れるようになったら、木部を取る。これで箱を作る材料としての樺皮が取れたことになる。このような樺皮を2つ用意する。箱を作る作業は大変難しく、かなりの技術が要求される。まず1つを弱い火で柔らかくし、裏返す。次に、裏返したほうを外側に、もうひとつと重ねる。内側にした皮は上下2cmぐらい長いほうがいい。そして、この円筒形より少し大き目の2枚の丸い板を用意し、1つは底にし、もう1つは蓋にする。底を嵌め込み、3、4の木釘で固定する。蓋にする板は真中に穴を開け革製の紐をつけ、取りやすくする。また蓋の側面は本体を傷つけないように、丁寧に磨きなめらかにする必要がある。このままでも箱は使えるが、外観をよくするため、また長持ちさせるため、毛皮や布で箱の縁を包んだり、いろいろな模様を本体や蓋に施したりすることが多い。また、動物の腱で作った糸で縫い合わせる方法もある。

また、トナカイエベンキ人は樺皮と毛皮や布と組み合わせて手工芸品をよく作る。女性用のハンドバッグ、マル（神の総称で、中身は動物や人間の形をしている偶像、動物の毛、皮紐など）をいれる箱、移動する時トナカイの背中に載せてものを運ぶ箱などである。これらの製品はカラフルで美しいだけではなく、大変丈夫で世代をこえて使われることも多い。樺皮の舟、大きな箱は一般に男性がつくるが、これらのものは主に女性が作る。かつて、これらの製品を上手に作れる者は人気者になったり、あるいは人々から尊敬されたが、逆に、できないと嫁として失格であったと人々は言う。

樺皮で作った碗やお箸を入れる箱



これらの模様は樺皮製品だけでなく、毛皮製品にもよく施される。



トナカイの絵やトナカイの独特な角の形の模様は樺皮製品に多く見られる。

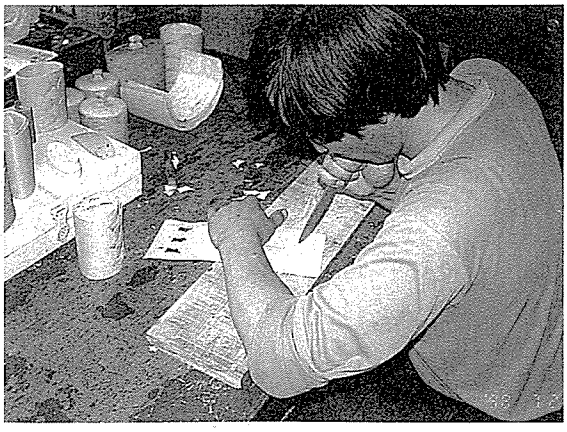
白樺の皮製品に施される独特な民族模様

トナカイエベンキ人が作る白樺の皮製品の中で、舟とテント覆い以外のほとんどすべての製品にはいろいろな模様が刻まれる。これらの模様の多くはトナカイをはじめとする、動物や植物にもとづいている。特に、トナカイ、野生鹿類の角の形から発想を得たデザインである。

トナカイエベンキ人は主に2つの方法で模様を施す。1つは現地の言葉で「圧花」といい、錐状の工具の先端を樺皮に強く押して模様を出す。先に下書きを描いて、その線に沿って行うのが一般的である。もう1つは「点花」といい、太い針で樺皮に描こうとする模様の線に沿って小さい穴を順番にあけて行く。これ以外に、私はまだ見たことがないが、「焼き絵」もあるという。

かつて、トナカイエベンキ人は果実をつぶし塩水で煮込んで作った顔料や樹液で製品の上に施された模様を彩っていた。最近は、主に町で買った漆が使われている。

トナカイエベンキ人の白樺の皮製品はこの地域の自然環境にうまく適応した特徴を持っている。これらは長い年月をかけて生まれた彼らの経験と知恵の結果であり、また美を追求する彼らの精神世界の表現でもある。



観光用の樺皮製品を作っている

近年観光化が進むにつれて、樺皮製品は観光お土産として売られている。